

# 明治の佐伯三青年 (18)

—— 龍溪・鳴鶴・鶴谷 ——



## 御手洗 一 而

(賛助会員・川越市小堤)

### 京都の動向

矢野や藤田はまだ若かった。

矢野が勝手に沼間と奔走し、藤田が情報集めに四苦八苦している頃、「東京日日」の福地は、すでに京都から新しい情報を打信していた。なにしろ、明治天皇が京都に駐在し、ほとんどの政務が京都で処理され、野に下った名士も続々と京都に集まるというのに、記者がじっと東京で情報を待っているのもおかしいものである。

藤田は落ち着かなかった。風邪気味の熱をおしても、自分が京阪に赴くべきだと考えながら、あとのことが気懸かりであった。まして、意気を感じてとび廻る兄貴分の矢野の姿を見ていると、矢野に記者として京都市行きを頼むのは遠慮があった。

この様子を察した栗本御大は、藤田の代りに矢野に京都市行きをすすめた。

— 政府要人の間や、京都に集まる在野諸名士の間を往来して、逐一その情報を集めるのは矢野が最適任である —  
栗本自身もそう考えていた。

藤田の言動よりは、こんな仕事は、顔の広い政治好きの矢野の方が適任であった。幸いにも、矢野は熊本城の籠城がきまって、東京自由都市の構想に見切りをつけた今、新たな天下の情勢を予期して、

現状では政治の中心になった感のある京都に心を動かしていた。栗本はそれを察して、いわば、政治向きの記者として、矢野に眼をつけたのである。

その頃藤田は、京都の情報収集とは別に、社長の小西や栗本からもう一つの相談を受けていた。相談とは戦場を駆け廻って、ともに戦況を報告出来る従軍記者の派遣のことである。記者は身体の頑健な文才のある機転のきく者を選ばなければならなかった。

この時、藤田は「この仕事は犬養向きだ」と思い当たった。

藤田は早速犬養を報知社に呼んで、従軍の必要性を説きながら、戦況報告の依頼に対する従軍記者の条件を示した。

藤田は犬養の顔を見るなり、短刀直入に切り出した。

「おい犬養、一仕事やらぬか」

「一仕事と申しますと——」

犬養はきょとんとしていた。

「実は、この度の現地報告は、当然俺の行くべきところなんだが、少し健康が勝れぬし、矢野さんも戦場は

不向きにみえる。一つ熊本まで出向いて、戦況を逐一報告してくれぬか。東日は主筆の福地がすでに京阪から打電している。俺はそれに対抗して書けるのはおまえ位のものだと見込んで頼むのだが、その代り、この乱が治まったら、義塾を卒業するまでの学費は、社で出すように約束する」

藤田は一気に言い終えると、頭から犬養に行かせようとし、犬養にとっても悪い条件ではなかった。

だが、社長の小西や栗本は、若い犬養にこの大任を任せてよいものかどうか、心配がないわけではなかった。

むしろ、藤田が無理矢理に押し切ったのである。藤田はそれだけ犬養を誰よりも信じていた。

藤田は犬養に新調の洋服を買い与え、犬養もまた洋服姿に水筒を肩にして、勇躍東京を出発したのは三月一日であった。犬養は一路東海道を西へ下り、矢野の待つ京都へ向かった。

藤田は犬養を送ってから、安心したせいか再び熱を出してしまった。

京都に着いた犬養は矢野と連絡をとり、しばらく休養

のち九州に向かった。

一方、犬養を送り出した矢野は、寝食を忘れて名士の間を駆け廻った。報知入りした矢野が、栗本御大を慕って集まってくる旧幕臣に知己を得たのも好都合であった。例えば板垣が下野して土佐に帰る時、矢野は報知新聞社で板垣に会っている。

その時板垣は、

「西郷の真意を知る者は自分一人である」

と、笑って多くを語らなかったが、矢野の頭には妙にその言葉がこびりついていた。

ちなみに、矢野ののちの述懐によると、西郷に一面識もなかったことを終生残念がっていた。

この時期、これらの野に下った名士は、自然に京都に集まったが、矢野がもっともよく往き来したのは大江卓であった。大江は後藤象次郎の愛婿であり、沼間と同じく仲の良い狩猟仲間であった。そんな関係から、矢野は後藤から丁重な紹介状をもらい、始めて木戸孝允に会った。

木戸については、伊藤博文よりもずっと背が高く、大柄ではあったが中肉中背で、容貌も温和で挨拶も丁寧で

あり、後進に対しては殊に親切で、なつかしさを感じさせる温い肌合いの人として矢野の眼に映っている。

木戸との会談では、木戸が坂本龍馬の仲だちによって始めて西郷に会った時の様子や、池田屋騒動に続く維新の変革については、西洋風の改革が少し急激にすぎるところを案じておられたらしい。

「御維新も実は思うよりたやすく出来たのである。トコトナヤレ節を唄いながらでかしたようなわけで、実は皆難儀がたりなかった。それ故にその後は、とかく政府のすることが、勢に乗じて軽卒にみえる。もしあの時に、もう少し青息吐息で苦しんだら、こうでもなかったであろう。今少し慎重にせぬと、世事がまた後戻りするような不経済がありはせぬか」  
とも話された。

談話の途中で鳥尾中将が現われて、何やら戦況を報告した。矢野のみた鳥尾は随分木戸と親しいらしく、ガウンのままで袴も着けず、朝晩報告に来るらしいが、二人の応対をみると、

「侯も同等の人の如く扱っていたが、鳥尾の方は、一段高き先輩に対する如き言語態度であった」と。

以上は矢野の手記にある。

当時の木戸は、昔を述懐する時に、口ぐせのように、「癸丑甲寅の頃には——」と話出す。後日矢野は、後藤に会って紹介の礼を述べた時、この「癸丑甲寅の頃」の話が出て大笑いになったという。

その寅丑甲寅の頃志を同じくした西郷が、今や九州で反乱を起こしている。矢野は、自分が報知の記者であることを忘れたかのように、高官名士の間を東奔西走したが、矢野の頭の中には、相変らずいつも自衛協会なる発想があった。そして、記者らしい仕事は、わずかに「京阪別報」を東京へ送るぐらいであった。

その頃犬養は戦場に着いていた。

九州の戦況は、丁度田原坂攻防の真最中であったが、犬養は知人に頼んで、熊本県御用係という名目だけの辞令をもらい、以後熊本城連絡まで野津旅団と行動をとめた。犬養の肩書は、当時「戦地探偵人」というものであった。

犬養の実戦の目撃談が、「戦地直報」として報知紙上にのるのは三月二十七日からである。最前線に出た犬養

の戦況報告は、さすがになまなましく読者の評判となったが、前線に出るに従って一時通信がと絶えた。

心配した藤田は、連日犬養からの連絡を待ったが、遂にいたたまれず自ら戦地行きを決意した。厳寒がすぎ春の到来が日に温度を増して、この頃になると、余り身体が強くない藤田にとっては幸であった。

京都入りした藤田は、前以って連絡してあった矢野を宿に訪ねたが、いるはずの矢野は留守で、腹立たしいままに寝てしまった。藤田が間もなく帰って来た矢野に起こされて眼を覚ました時は、辺りはすでに暗くなっていた。

藤田は矢野の顔色から何かあったと直感したが、切り出した二人の言葉は同時だった。

「犬養は殺られたのか」

「何かあったのですか」

藤田は手を横にふりながら、ただ一言、

「分からんです」

と、犬養から連絡や情報のないことを告げた。

「そうか。あの記事からすると最前線に出ていたのであろう。無茶な奴だからなあ」

矢野の言葉も溜息交じりであったが、藤田は、むしろ、社長や栗本御大に犬養を無理押しした責任を感じているふうであった。

「ところで何か変わったことでも——」

「いや、今日はある高官から妙なことを聞いた。そのために遅くなったのだが——」

と、矢野は一息入れた。

「妙なこと——」

と、藤田は問い返した。

「茂吉。陸奥を知っているであろう」

藤田が矢野の口から陸奥の名を聞くのは二度目であった。

「あの、自衛協会発足の勧誘を断われた——」

「そう、その陸奥が大江さん一派と組んで、陰謀を企てているらしい」

「勧誘を断ったのもそのためですか」

「そうかもしれないね。今から考えれば思い当るふしがある。沼間さんも当時陸奥のことを謀反気のある奴だと言っておったが、彼なりに独自の方法を考えているのかもしれない。だが情報は筒抜けなんだ」

情報が筒抜けと聞いて、藤田は急に膝を乗り出した。

「政府が探知しているんですか」

「そこなんだ。政府は手強い西郷軍に対して、次々に援軍を九州に送っている。旧藩の大藩から兵を募り、薩摩に対抗させているんだ。会津然り、そして紀州藩の話もある。ところが今日聞いた話では、紀州兵はいかんと言うんだ。紀州兵など九州に送ったら、どちらに向かって鉄砲を撃つかしれたものじゃないと話していた」

藤田は情報が入り乱れていると思った。

「それは木戸参議の話ですか——」

「いや、伊藤に聞いた話らしい」

藤田の問いが直ぐ返ってきた。だが、矢野の口からは、伊藤博文に聞いたという高官の名は遂にあかさななかった。

「茂吉、今の話は内緒だぞ。しかし、少くとも伊藤は、陸奥や土佐・紀州の動きを的確につかんでいる。俺はその情報を確かめるために大江さんの方へ廻ったが留守だった。明朝早くもう一度大江さんを訪ねることにするが、一派が何を企てているか、確証を得なければ

大江さんも危いと思う」

矢野は直感でそう思ったが、事件の推移も事実その通りであった。

この時期に、大江卓・林有造・陸奥宗光等がたくらんだ謀反は、やがて発覚され、八月八日、先ず林有造、岩神昂、池田応助等が相前後して捕縛され、陸奥は六月に拘引されている。この謀反計画とは、板垣の静止にあきならず、西郷に呼応して兵を起し、大阪を襲撃して鎮台を制圧するというものであった。

のちに、閣僚に陸奥を起用した伊藤は、この時のことを陸奥に問うと、陸奥は一言、「資金がなかった」と答えたというエピソードまで残されている。

当時、矢野の得た情報は確かだったのである。矢野は翌朝まだ暗いうちに宿をとび出した。藤田もその日のうちに神戸に向かい、神戸からは船便を利用したが、出船の前夜、藤田は犬養の通信を得て一安心することが出来た。

犬養の記事は、苦心のあとが見えながらも、相変らず歯切れのよい文章で、そこには自ら体験した実戦そのま

ゝの描写があった。

### 薩軍佐伯に侵入

藤田が東京を出てから九州に着くまで、九州の戦火は各地に飛び火していた。

三月二十八日には、福岡県の士族が秋月城に拠り、四月一日にかけて、大分県中津の増田宗太郎等が西郷軍に加担して兵を起し、県庁を襲撃して退けられると肥後に走っている。

藤田は犬養の消息を知って一安心したものの、矢野の話を総合すると、政府の情報収集の確かさにむしろ驚いていた。

政府軍は意外に強かったが、藤田にしてみると、無意味な戦の方が腹立たしかった。士族も平民もない。民意を結集して維新の開化を促進することが藤田の持論だったからである。しかし現在の明治政府に不満がないわけではない。新聞条例による捕縄の体験は、藤田自身が身体を張ってまで一番よく知っていた。だから西郷軍に同情したいところもあった。

だが、戦場が近づく、そんな議論の余地のないこと



犬養は、誰はばかるともなく大声を張り上げ、辺りを見廻した。

「確かによくもった。先刻谷司令に会って、司令が城外に出るといふ沼間さんの話をする、司令は沼間の奴がかと言って笑っておられた。一かどの人物だな」藤田は犬養にこう話しながら、沼間と矢野の賭けを思い出し、独りで感心していた。

熊本城の決着がつくと、藤田は犬養を伴って一旦帰京することにした。熊本城の攻防戦によって、この戦争の一応の目途をつけた藤田は、犬養の慰労もかねて、矢野と共に京都で一夜の宴を張り、その労をねぎらった。

その時藤田は、その後気になっていた大江のことを、そつと矢野にただしたが、土佐の諸士や陸奥等有志の結束は堅く、外からじっと見守る他に方法がないとのことであった。矢野はもう暫く京都に残ることにして、藤田と犬養は再び大阪神戸を漫遊し、海路横浜に着いたのは二十七日の朝であった。

新聞社に出向した犬養は、読者の反響も大きく、一躍花形記者として人気者になっていた。藤田が社長や栗本

御大に面目を保ったのはいうまでもない。いつも自己流の鋭角的な物の考え方をする藤田に、反面今回のような犬養に対する思いやりがあり、いざとなれば、単身行動してその任に当る責任感があればこそ、若輩ながら上司に信用があったのかもしれない。

しかし、戦況は藤田の目安通りにはいかなかった。薩軍は、熊本城の包囲を解いてから、その抵抗はますます熾烈を加えた。そこで、「戦地直報」で評判をとった犬養は、再度戦地に赴くことになった。

当時、犬養が実兄にあてた手紙には、「先般藤田茂吉子罷越シタレトモ折悪シク同人病氣ニ而帰京致余儀ナク小生ニ右編輯事務ヲ惣括シ呉レ候様依頼ニ因リ云々」とあり、病弱の藤田は再度同行出来なくなったことを記している。犬養は、五月四日東京丸へ乗りこみ、神戸に寄港しながら、同夜をそのまま長崎へ直行した。

のちに報知社を去る犬養を考えると、この再度の従軍は不思議に思われるが、この頃の犬養にはもう一つの志望があった。それはさきの従軍で現地採用された士官達を見て、出世の早道に軍人になりたいという希望が脳裏をかすめていた。そこで犬養は、矢野や藤田の友人であ



った沼間に依頼して、谷司令への紹介状を書いてもらったが、谷司令は戦争の終結は軍人の不必要を説いて、学業の継続を諭した。たゞし、それ以後の犬養の取材については、谷司令は大へん好意的であった。

熊本城攻略から退却した薩軍は、宮崎県境との山間部に逃げこみ、椎葉の山中を南下して再び人吉に落ち着いた。

その間、島津久光の休戦勧告がないわけではなかったが、政府はこれを却下した。政府は、西郷軍の討伐により、以後久光による薩摩藩の存続さえも警戒していた。政府はこの戦乱を機会に、明治政府一元化の病根を根絶したい腹を決めていた。

木戸などはその急先鋒であった。

この時期に、矢野は再度木戸を訪問している。木戸はすでに病に冒され、矢野は病床で木戸に引見された。

その話の中で、

「西郷騒ぎも随分長く、官軍がてこずっているようにみえるが、しかし——」

と言いながら、枕元の「日本外史」を指し、

「昔、豊公の薩摩征伐も一年近くかかっているから、今度もそう簡単に片づくわけにはゆかんではないか」と、笑っておられたことを矢野は述懐している。

矢野の表現をかりれば、「懐かしい先輩」であった内閣顧問木戸孝允は、十七日頃から病篤く、西郷との決着を見ずに二十六日この世を去っている。

木戸の病状と期を合わせるように、政府軍は各個に人吉を攻撃し、西郷は月末には宮崎の町に逃れた。肥後側とは別に、日向側の状態は政府軍の警戒もなく、不思議なほど平穏であったが、これも西郷軍主腦の作戦が統一出来なかったことを表わしている。

日向側は、野村忍介だけが唯一人豊後進出を考えて、延岡に本営を置いていた。野村の着眼は、豊後から四国・中国を押さえ、更に中原を望む作戦を立てていた。そのためには大分県の制圧が地の利を得ていた。

薩軍にとって都合がよいことには、豊前・豊後は中世の大友氏の除国以後、徳川期においては小藩が分立していた。そのため、一つの河川一つの盆地が孤立化して小国の形状をなしている。幾重にも連なる異なった連峰に

閉ざされたこれらの各地域は、各郡との連絡もとり難く、薩軍にとって各個撃破にはもってこいの地形であった。

野村隊の先鋒隊は、突如として宗太郎峠を越えて大分県に侵入した。政府軍は重岡に警視分署を置き、巡查三十数人で警備に当らせていたが、先鋒隊はそのまま宇田枝から竹田へ入り、五月十三日に竹田に侵入すると、本営を古町に置いた。

無防備のような状態であった大分県にとって、時の権令香川真一はじめ、県民の驚きも一方ではなかったが、熊本城にいた政府軍主脳の驚きも同じであった。薩軍の大勢を掌握し得なかった山県有朋は、野村隊の大分県侵入に着目して、野津鎮雄少将にその鎮圧を任せた。

竹田に向かう野津軍の中に犬養も加わった。

竹田の本格的な攻防は五月二十日に始まり二十九日に一段落するが、その間重岡に待期中の薩軍は、豊後水道沿いの各町に触手をのばしていた。薩軍が矢野や藤田の郷里である佐伯に侵入するのは二十五日であった。

薩軍が重岡に入ってから、佐伯の町民は極度におびえていた。町民は薩軍の侵入を予期して、家財道具をまと

めて僻地に避難する者が多かった。

佐伯は全くの無防備であった。

佐伯というよりも、大分県全体の警備が、警視庁巡查五百と軍艦「孟春」一隻、あとは旧藩士族の寄せ集めに頼るという寥寥たるものであった。そして、十六日にはもう一隻の軍艦「浅間」が下関から下った。

佐伯に侵入した薩軍は、野村忍介麾下の第五番中隊、第七番中隊他の約三百余人で、佐伯を占拠するや否や、士族の勧誘や軍資金の提供を求めて戦力の増強につとめている。

もともと佐伯は、維新後旧藩士族が学校党と兵隊党の二派に分裂したいきさつが尾を引き、新政府に職を得た学校党員と失職組の兵隊党との確執がひどく、旧士族達は、薩軍の侵入にさいしても、統制のとれないまま全くの無気力であった。

なすすべを知らない町民の中で、ただ一人この難を浦村に避け、不自由な身体ながら、船を雇って海路佐賀関に渡り、県庁に具申した男がいる。

この男が佐藤蔵太郎である。

佐藤は、のちに矢野の「経国美談」を稿筆し、自らも

「惨風悲雨・世路日記」を著わした菊亭香水であり、晩年は史家として鶴谷を号して名を成したが、矢野とともに上京して報知社員となるのは明治十五年、のちの話である。西南の役当時は師範学校を出て郷里の教職にあった。

#### 表紙解説

### 市園道祖神

所在地 宇目町重岡字市園

この道祖神は通称市園道祖神と呼ばれている。総高一〇八cmで材質は凝灰岩で中央に道祖神と陰刻されている。文化五年（一八〇八）の造立である。猿田彦の塔などには有るが、道祖神と書かれたものは、佐伯・南郡にもその例がないのではないか、もし有ればお手数ですが、是非お知らせ下さいますようお願いします。

道祖神といえ、関東・中部地方の男女二神が手を取り合い、和合の形を示したものを思いおこす。

道祖神は塞さいの神ともいわれる。塞さいはささええぎぎるの意で悪霊などが入り込まないように防ぐために祭られた神が本来の道祖神であった。幸の神・障の神・歳の神・妻の神

などと呼ばれるのは塞の音に通じるため呼ばれたものか。

『古事記』『日本書紀』にあらわれる、「ふなどの神」ふなどのかみ岐神はこれで、また塞大神・道神・禊神とも古書には記されて来たように、多くは道路の辻・村境・峠などに奉祠され、外来の邪悪なものをさえぎる神とされている。

この神が猿田彦命に付会されたことは、古典にも明らかであるが、その理由は明らかでない。おそらく神々の来臨にあたり、その先導にあたる神と考えられていた猿田彦が、境の神としての道祖神に連想されたものである。

道祖神の祭は正月の十四・十五日頃に行われるものが一般的で、辻に竹やわらを積みあげて火をかけるものが多い。どんど焼・左義長はこの道祖神祭りに外ならぬとみられて来た。

関東・中部地方の二神和合の姿は、境界をかためるために、この男女円満の姿を示すことは、邪悪者をしりごみさせるのに有効だと考えられて来たという。道祖神は更に縁結びの神・性の神とも見られている。

参考資料 ふるさとの文化財うめまち

世界大百科辞典（平凡社） 外